高橋和巳論（二）

――中国文学論の一端――

安東諒

五

前稿に既挙した如く、高橋の中国文学の専論は八篇残っている。それに李商隠を論じた「詩人の運命」と注解、王士稹の注解を加えればほぼ全てである。進論の便宜上、八篇を再掲する。

六朝美文論①
陸機の伝記とその文学②
潘岳論③
顔延之の文学④
江淹の文学⑤
劉勰『文心雕龍』文学論の基礎概念の検討⑥
中国の物語詩――おもに「秋胡行」について⑦
顔延之と謝霊運⑧

①から⑥までの論文は『高橋和巳作品集』の「中国文学論集」（以下『作品集』と略記、河出書房新社、一九七二年）が編まれた時、高橋自身が作成して編集者に渡した順序構成であったことをその解題に記している。⑦の「秋胡行」は顔延之の作品であり、⑧は修士論文で未発表であり高橋の作成表になかったものを編者の方針で追加したことをも解題に記している。そうだとすれば、⑥までの順序構成には、高橋の意図が反映していることになる。これを今時代順に並べれば次の如くなる。②③④⑦⑧⑤⑥。①は通時の論だからここには含まない。その中で②③④⑦⑧⑤は詩と詩人論であり、①⑥とは少しその内容が異なる。ついでに著作時代順序も書いておこう。⑥⑧③②④⑦①⑤となる。

陸機・潘岳・顔延之・謝霊運・江淹は、前稿にも書いたように六朝時代を代表する詩人であり文人でもある。ひとり劉勰のみは、今で言えば評論家であり、創作の詩は無いが文章が二篇残っているのみである。

著作年代順に論じる方が作者にとっても納得のいくことのように思う。

「劉勰『文心雕龍』文学論の基礎概念の検討」は、卒業論文であった。この論は、京都大学文学部中国文学研究室発行の『中

国文学報』第三冊（昭和三十年十月）に掲載されている。学界で名の通っている学術研究雑誌には、ふつう大学院生の論文が載ることはあっても卒業論文が全文掲載されるということは、現在にあっても極めて異例に属す。

その力量を推察するに十分なものがある。況して『文心雕龍』そのものは、学部卒業程度の学力で読みこなせる書ではない。それを証す文章がある。

「『文心雕龍』そのものは、たいへん難解な書物である。私などには歯が立たない。せっかくの機会だからと思って、今度、范文瀾の注釈本を人から借りてあるのだが、通読はおろか、五分の一も眼を通せなかった。その代り、鈴木虎雄の解説を読み返して、それが簡にして要をえており、ほとんど私に必要なものは尽されているのを知って鈴木に対する尊敬の念を新たにした。若い高橋が、まだ語学も不十分であったにちがいない学生時代に、ともかくこの難物にとり組み、それを俎上にのせて奔放自在に思弁を逞しくしたのは壮とせねばなるまい。処女作『捨子物語』がそうであるように、この処女論文もまたかれの資質をよく語っている」（『人間として』6高橋和巳を弔う特集号、「高橋和巳の学問」一九七一年六月）

魯迅研究で知られ、戦後日本の論壇では、硬骨漢ぶりを発揮した中国現代文学研究の第一人者竹内好の率直な感想であろう。

作家の処女作に、その作家の原質が色濃く投影されているというのは、大方の評者の共通認識であろうが、竹内も言うように、研究者にとってもそれは例外ではないらしい。高橋の全業績を考察する上で、彼の最初の関心が『文心雕龍』にあったことは、一等重要で不可欠の問題であるように思う。

「通読はおろか、五分の一も眼を通せなかった」范文瀾の注釈書とは、文心雕龍研究者の間で既に古典的名著と評価の高い『文心雕龍注』である。高橋が京都大学を卒業したのは一九五四年なので、一九六〇年代になって中国、日本、米国で出版された現代訳本を見ているわけもないことからすれば、范文瀾の書を参考にしていたであろう。その范文瀾の書には目録の前に例言と校勘記があり校勘記の冒頭には「鈴木虎雄黄叔琳本文心雕龍校勘記」なる一文があり、第一緒言はこういう書き出しで始まる。

「大正乙丑春、斯波吉川二子、在大学、課以文心雕龍、因校諸本、相共読之、二子用工甚力、起予之言不勘」と。

訓読すれば「大正乙丑ノ春（一九二五）、斯波（六郎）吉川（幸次郎）ノ二子、大学ニ在リテ課スルニ『文心雕龍』ヲ以テス、因テ諸本ヲ校シ、相共ニ之ヲ読メリ、二子ガ用工甚ダ力（勤）メ、予ヲ起スノ言、勘（少）ナカラズ」となるのだろうか。これに依れば、鈴木の大学での授業テキストは『文心雕龍』が使用され、諸本の刊本の校勘が行なわれ、斯波、吉川の二学生と共に読んだらしい。二学生は真面目な学習態度で、先生を啓発する発言さえも少なくなかった、ということである。斯波六郎は、後に広島大学で教鞭をとり、『文選』学、『文心雕龍』学において双ぶ者なき大家となる。その業績は、現代中国におい

ても高く評価されている。吉川幸次郎は、高橋の恩師である。中国文学界の不世出の泰斗である。あれほど中国文学の全分野に精通していながら、吉川には『文選』『文心雕龍』に関する専論が見当らない。その分野の研究は、学友の斯波に委せきったのであろうか。学問研究の清しき一事であろう。

後年、吉川は斯波の「『文心雕龍』札記」に懇切な評文を寄せている。両氏の文章は、現代中国の『文心雕龍』研究の理論学の雄である王元化の選篇で『日本研究〈文心雕龍〉論文集』（斉魯書社、一九八三年）と題された日本人の『文心雕龍』研究の主だった論文を中国訳した書の冒頭に掲載されている。

吉川は終生『文心雕龍』関係の専論を著さなかったが、彼の逝去後、師の私蔵書を閲覧した弟子の興膳宏によれば、本書にはびっしりと書き込みがなされていたそうである。

興膳は、日本だけでなく中国、台湾、香港ひいては欧米の中国文学研究界にも名の通った龍学の権威でもある。彼の『文心雕龍』関係論文もつとに中国で有名でその業績は、中国訳され単刊本にもなっている。『興膳宏〈文心雕龍〉論文集』（彭恩華編訳、斉魯書社、一九八四年）がそれである。興膳宏は、現在京都大学文学部中国文学科の教授であり、高橋の後任である。そうであってみれば、鈴木・吉川・高橋・興膳と連なって、いわば京大の中国文学科にあっては『文心雕龍』研究は、表現は適格でないかもしれないが、お家芸、〈家学〉のようなものであった。

高橋の『文心雕龍』研究もそのような伝統に培われた所産であったに違いない。

竹内好が「尊敬の念を新たにした」「簡にして要をえた」と記している鈴木の『文心雕龍』解説（『支那詩論史』）は、校勘実証に基づいて篤実な授業演習と研究の下に成立したものであって、一朝一夕のそれではなかったことがわかる。

六

高橋の卒業論文に到る前にもう少し回り道をしたい。彼は大学に入ってのち、フッサールの『純粋現象学ならびに純粋現象学的哲学考察』と埴谷雄高の『死霊』と劉勰の『文心雕龍』によって震撼されたことを「私の読書遍歴」（『全集』第十四巻所収）に書いている。

これらの書物との執拗な対話によって築かれたものがあることを言っている。

人は生涯のうちに自分自身を心底から震撼されるような本に出逢った体験を誰しもが持つのであろうが、それは青春の時代が多い。

いわばその人の精神形成の原質とか核芯となりうるものである。いうまでもなく自己を形成する素因は書籍のみではなく、人や物や事象との邂逅にも因る。高橋の場合、本としては上記三冊が彼に決定的な影響を与えたらしい。また人としては、彼の師である吉川幸次郎との出逢いが挙げられよう。事象としてはあのまけいくさがあった。この本と人と事象の三件との出逢いが、彼の精神形成にいかに重要な作用を果たしたかは、どの

ように論じても論じ尽くされることはないだろう。

まず本については、フッサール、埴谷、劉𤋮の表現態度に共通するものは、〈対象の凝視〉ということであろうか。高橋の言葉で言えば前稿に記した〈観賞的態度〉ということになる。〈対象の凝視〉などということは、何の世界にも通じる必須の条件であろうが、この三人の著作を読んでおのずから解ることは〈ものを視つめる〉ということが生半可なことではないということである。

意識を対象に密着させ、その流れや動きを何の主観も交えず冷静に追うという心的操作は、現象学の入口であり、フッサールの現象学の真髄でもあった。また埴谷雄高の『死霊』は、彼が切望する〈意識が即存在〉であるような凝視者の小説である。現象学の術語の〈エポケー〉や『死霊』の基調音である〈自同律〉の不快について何ほどかの理解ある者ならば、私が何を言わんとしているかが少しは解っていただけるものと思う。

「現象学の〈真理〉とはだから、「意識」が、自己を構成し、他我を構成し、諸物や、諸理念や、諸意味を構成し、そうして結局〈世界〉を構成していく道すじを、誰でもがまったく客観的に学びとれるような仕方で言葉に定着することであると言えるだろう。フッサールが「厳密学」と呼んだのは、こういうことだったのだ」(『別冊宝島』44、現代思想・入門)と新しい時代の思想・文学界の俊英竹田青嗣は「現象学」の解説にこう述べている。

「誰でもがまったく客観的に学びとれるような仕方で言葉に定着する」(傍点は竹田)という文章表現の理論的方法論を劉𤋮は『文心雕龍』の神思篇に細密に考察していることを知る者は、高橋がなぜこれら形而上学の理論に心魅かれていたかがよく解る。現象学の「エポケー」と神思篇の「虚静」とを結びつけるのは無謀な試みであること筆者もわからぬわけではないが、高橋の内的位相にあっては、それらが結ばれていたことは、想像に難くない、とは言っておいてよいかと思う。高橋の小説作品の地の文の描写の余りにも細密で長いそれに辟易している評者が少なからずいるが、それはまた彼の好みの資質であったこともこの辺りから推測しうる。

「日は暮れ、月も傾き、明け方、川原へ罹災者とともに流されていったその川原の情景、河豚のように白い腹を出して浮いている死体、なによりも耐えがたい死臭。現象学者のように、樹々は風によって動くとはみず、その動く一枚一枚の葉の形状までも西村は書きこんでいった。理論的研鑽によってではなく、記憶への忠誠によって西村は純粋現象学の方法をおのずから体得していたのだ」(『憂鬱なる党派』一六六頁〜一六七頁、『全集』第五巻所収)というようなことになる。余筆になるが、この第五章の2には、この後に西村の友人で大学で近世哲学を学んだという古在の哲学史の講義のような文章が綴られている。前引の文に続けて「庭にある一本の樹、路傍に転がる履き古した下駄一つも、その周りを廻ってみないかぎり、人にはその形状はわからず、そして所詮人は常に物の一面しか見てはいない。免れがたい一面性、それを逆に西村は固執した。走っている列車

の片側しか見えなくても、もちろん人には、その乗物が立体的であること、隠れている裏側にも同じ数の窓、同じ大きさの車輪があることを知ることはできる。想像力で、理解で、変らない日常に立脚した常識によって。しかし西村は、ことさらに焼けただれた死体の裏側を想定しなかった。死と苦痛の裏面になにがあるか。そして、ほかならぬその時その場に〈死〉が枕をつらねて転がっているのはなぜか、とも質問しなかった。――として、その方法こそが逆に、現にそこに、蟹のように手足をまげて転がっている死体、棒切れのように立ちすくんでいる並木の残骸に対する最も正確な見方だったのだ」

原爆被爆直後の広島の町の惨状を「記憶への忠誠」によって「体得した」「現象学的方法」による西村の描写の姿勢はこうなる。それが〈純粋現象学の方法〉かどうかということではなく、とにかく小説にこういう描写をする作家が出て来たことに、当時まだ学生であった私たちはびっくりしたことを確と憶えている。良かれ悪しかれ、これが高橋の資質であり文体でもある。彼は哲学に関しても相当の造詣があったことは、友人の証言や諸評論から窺いうるが、川西政明・村井英雄の共編になる「編年体・評伝高橋和巳」(『国文学』昭和53年1月号、高橋和巳の問いかけるもの)には次のような記述がある「この年、(一九五一年、昭和26年、高橋20歳)再び桑原武夫の文学概論を受けるとともに、哲学専攻の特殊講義である三宅剛一の現象学講義を聴講した。……現象学講義は、哲学専攻の学生ですら容易に聴き続けることの難しい授業であったが、最後まで聴講し、この経験はその後小説を書いていく上で大いに役立った」と。余筆の余筆になるが、筆者は『文心雕龍』神思篇の文章の創作過程における外界の創作対象(劉勰の語では〈物〉という)と作者の意識(劉勰の語では〈神〉という)とがいかなる相関関係によって言語が産み出され文章として定着するかという〈神物融合〉の過程に興味を抱いて考察を進めているのだが、現象学もまたそのことを啓発する一項であった。もう少し言えば、人間の意識と外界の事象(既得の言語による観念の操作を含めて)とがどのように相関しうるのかということは、文章の創作の根源に関るだけでなく全ての観念世界を追究する学の根底に大きく横たわっている問題である。前引の高橋の文章を借りて少し説明すれば「走っている列車の片側しか見えなくても、もちろん人には、その乗物が立体的であること、隠れている裏側にも同じ数の窓、同じ大きさの車輪があることを知ることはできる。想像力で、理解で、変らない日常に立脚した常識によって」ということだが、これこそが想像力であり日常の常識であり、文章創作の秘密の鍵も実はその辺りにある。西村はその想像力を意識的に避けて〈エポケー〉に徹して冷徹な描写の態度をとったわけだが、現代哲学の歩んできた道程にあっては、この日常に立脚した常識を逆手にとって過去の哲学に再点検を迫る人がいる。先に記した筆者の考察を深めてくれる示唆を与えてくれるものである。

「世界現相は、森羅万象、悉く「意味」を〝帯び〟た相で現前する。各々の現象は、その都度すでに、単なる「所与」以上

の「或るもの」として覚知される」ということがそれであり換言すれば「「現相」は、〝本体の仮現した現象〟ではなく、さりとて単に〝自己自身を示すもの〟ではないこと、それはその都度すでに「所与以上の或るもの」であること」となる。（広松渉『存在と意味』緒論）

これは広松渉の〈四肢的構造論〉の発想の原点になるものだが、高橋の現象学的描写は今措いて、筆者にとってはこの広松渉の理論は、勿論難解な部分は多い（あの難字の群のことではない。あれくらいならまあまあ私にも読める）にしても、眼を開かされたことは確かである。

次に埴谷雄高の『死霊』は、彼が獄中で読んだカントの哲学とドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』の「大審問官」の一章に触発されて発想したことは、彼が述べているとおりである。意識が即存在でありえないことへの焦燥から紡ぎ出された一大実験小説とも言える。埴谷の『死霊』が高橋に対していかなる影響を与えたか？ということについては、余りにも問題が大きすぎて今ここでは処理しきれないので別稿に譲ることにしたい。

この二人の文学の同異の点は、川西政明の『不果志の運命――高橋和巳についての断片的な考察――』（講談社、昭和四九年発行）の「観念と想像力」の章に詳しい。その二人の相異点を埴谷自身が本書に寄せた序文に次のように書いている。「私は現実の者那教に接したとき、私自身の思想的課題に応じて大雄を私流に「架空」なかたちへつくりかえることだけに専念したけれども、高橋和巳は私の序文のなかの者那教からインドに実在するジャイナ教の歴史へ戻ってその「現実」のかたちの仔細を克明に調べはじめたのであった。私の精神的姿勢がひたすら妄想的、現実の向うへ数歩でも踏みでようとする非現実志向をもっているのに対して、高橋和巳のそれは、学問的で、そして彼自らが「還行」と名づけたところの生々しい現実性を帯びたものにほかならなかったのである」

〈還行〉の語は、高橋が『逸脱の論理――埴谷雄高論』（『全集』第十三巻所収）の終りで釈迦に託して埴谷に希望する鍵語であり、それは高橋自身の生き方の姿勢の自己宣言の要約の語でもあった。このことはもう少し説明が必要にちがいない。

「思うに、表現とは、何らかの型での思想の還行である。折角よじ登った高みから、涙をのんで俗界にひきかえさねば、その思想は餓死してしまう。それゆえにまた、『死霊』の終末近くに予定されるというマハーヴィラとシークハ・ムニとの対話に、まことに勝手極まる注文といわねばならないが、その全否定と全肯定の出あいに、釈迦の〈還行〉という観念が付けくわえられることを希望する。……この二教の始祖の思弁と立脚点に、それほどの大差があったわけではない。無所有の観念、平等の観念、そして壮大に否定し去ってゆく弁証の形態、教典に結集される過程の相互影響もあろうが、むしろ共通する部分が多い。何が違ったか？救済論的には、彼らが観自在の境地にはいったとき、そのときなお直線的に、飢餓衰滅へと進んだか、はったと立ち止り、しばらく逡巡して振り返り、窶れた頬に涙

しながら、いま超越した穢土、悟りえざる凡愚の満てる〈娑婆〉へとひきかえしたかの相違にすぎない。架空対話の場では、虚体論志向の論理からいって、さらにまた、〈それゆえ〉にと断崖からつき出ずに横にずれたその〈還行〉構造からいっても、釈迦の方が破られるのであろう、と私は思う。だが、彼は還行せねばならない」

高橋は別に解りにくいことを言っているわけではない。自己救済（他者救済でもよい）のために閉居修業した者は、その修業中に身につけたであろう観念による世界の構築の知恵を他者の為に役立てよ。その為には〈娑婆〉に〈還行〉しなければならない、と埴谷自身にも切望しているわけである。

大雄のようにではなく釈迦のように今一度現実社会に還行せよと。高橋自身がその論に書いているわけではないが、その脳裡胸底には次のような想念もきっと抱いていたであろう。「老子のように生きるのではなく孔子のように生きること。それが生きるということだ」と。しかし、大雄も老子も生まれついての避世（隠遁ではない）者であったわけではない。悲惨の世と人とそれへの自己の非力を痛感したからこその避世であったに違いない。

埴谷雄高もまたそうであった。戦前の日本共産党運動に加わり、日本で最初の「農業綱領草案」の起草にまで参画した果ての避世であった。

「みつるほどのものはみ」てきた彼に〈還行〉を切望するのは高橋の自由だが、実践とはそれほど生易しいものではないことは、高橋自身が後年大学闘争のさ中に身をもって知ることになるわけである。その闘争への関りを高橋のすぐ傍にいた妻や近い友人たちは、こぞって不承知だが、現実社会への〈還行〉による実践は、彼の儒教精神とこの埴谷への切望に見てとれる如く、それは偶然の有縁からの関りなどではなかったことがよく納得される。それについてはまた後にふれる。

順序としては、ここで三冊の本のもう一冊の『文心雕龍』になるわけだが、それはもう少し後回しにして、師の吉川幸次郎との出逢いをみておこう。

七

高橋和巳の担当編集者であった川西政明は、高橋に就いて書いた本を二冊上梓している。

『不果志の運命』、（既上引）と『評伝高橋和巳』（昭和五十六年発行、講談社）である。両書には、身近にあった者しか聞きえない挿話なども入っており、高橋が家族や友人や同僚やそして妻にさえ見せなかった一面を垣間見せることさえあったことが窺える。彼はまた『全集』の校訂編集者でもあり、現在、生前の高橋和巳を最も深く理解していたひとりである。筆者の本拙論も川西の全仕事から相当の教えを享けていることをここに記してお礼を言っておきたい。もし高橋にこれほど有能な担当者が就いていなかったら、あれだけきちんとまとまった『全集』を私たちは今も読むことができたかどうかを考えた時、川西の存在には頭の下がる思いが切にする。

一九五一年（昭和26年）二〇歳の高橋は、四月、京大の文学部中国語中国文学科に進学した。その時の主任教授が吉川幸次郎であった。

清朝考証学の最後の後継者を自認する吉川の学問の実証学を根底に据えた中国文学の全業績の真価については、筆者ごときが贅言をはさむ筋合いのものではない。

師について高橋は「詩の絆――吉川幸次郎『随想集』のために」（『全集』第十三巻所収）に敬愛の念をこめて書いている。

「たとえばこうしたことがあった。学生時代、胃癌で父を失った私は、二、三日してそのことを先生に報告にいった。その時である。私の言葉をきかれるや、先生の顔色はさっと蒼ざめ、椅子から跳ぶように立ちあがられ、数歩あとずさりつつ、哀弔の言葉をのべられたのである。……母が遺骸にとりすがり、兄弟や親類の人々が落涙するさなか、ニル・アドミラルの状態にあった私は、吉川先生の哀悼の言葉を聞き、研究室を出て校門にいたるまでのあいだ、人のいぶかるのもかまわず、滂沱と涙を流しつづけた」

これを読んでそれぞれの人にとってそれぞれの受けとり方はあるだろう。勿論、私にもある。弟子の父親の死に対して師たる人は、儒教の喪礼ではどういう仕草をするのかなど、私は知らないし、そういうことはどうでもよい。しかしここで師の吉川が弟子に対して取った態度には、弟子を落涙させるほどのいたわりと思いやりが滲み出ていたであろうことは容易に想像しうる。現在、教育の荒廃が声高に叫ばれ、師弟愛など見るべくもないように見えるが、その最たる因は、師たる者の学問の怠惰ばかりではなく、こうした教え子へのいたわりやおもいやりの欠如にもあるのではないだろうか。

「学問と呟くとき、ずっしりと響くある重味を意識するのは、先生の存在を通じてである。そして、そうした学的誠実の上に、先生の中国の詩文への傾倒が開花する。これまで、いかなる痛切な文章も、それが教室で講ぜられるや砂を噛むような無感動な死語と化す経験に、大学における文学研究なるものを懐疑していた私は、あたかも手に触れたものをことごとく黄金と化したマイダス王のように、帙巻中に眠る詩文を先生がたちまち蘇生させ、開花させるのを、いくたびか驚異の思いで見聞きしたものである」（前掲書）

また高橋は師の授業を「吉川幸次郎『中国詩史』解説」（『全集』第十三巻所収）に、次のようにも述べている。吉川の授業は、多くの場合ノートは作らず、教壇でゆっくりと原典を見開いて引用し板書するというものであったらしい。

「時折り眼鏡を光らせて窓外に目をそらしつつ熟慮され、また語りつがれる。文章化された論文に比して、むろんある種の渋滞もあったが、しかしより自由な飛翔もあり、二時間の講義に出席すれば、学問上はもちろん、文学全般の問題について、かならず、何かの啓示がえられたものである。解説者は当時創作をひそかに志していたが、アカデミズムでは却って接しがたい文学することそれ自体の、言いかえれば普遍な文学的啓示をうる喜びを味ったものである。ある作品が教壇で講ぜられると、

とたんに色あせるというのが、大方の常識であるが、博士の場合は違っていた。帙の中にとじこめられ、一つの文献として睡っていた文章が、博士がその意味を説きあかしはじめるや、たちまちに一つの価値として躍動しはじめるのである」

他学については知らないが、こと文学に関する限り、大学の講義の〈味気なさ〉は、多くの人々の共通の諒解であろうが、高橋は吉川の講義に出席することによって、中国の詩文を肉化しつつ同時に〈文学する楽しみ〉をも味っていたわけである。教室には年々受業生は限りないほどいるだろうが、師の講義から啓示をうける者は、稀に違いない。中国の詩文の講義を通してそれが普遍な文学に通じるような喜びを味っていた、という高橋の述懐から師と弟子の二人格の出逢いの愉楽を思わずにはいられない。

先掲の竹内好の文章には、吉川は京都大学を卒業するとすぐ三年間中国へ留学し、帰国後、東方文化学院京都研究所の研究員になった。これが一九三一年。一六年間ここに在職後、一九四七年に京都大学文学部の教授となる。高橋の京大入学は一九四九年。その間わずかに二年。もしかりに吉川が前任者の青木正児と交替の時期が少し遅れて「高橋が最初に吉川でなく青木に出あっていたとしたら、かれの運命は大きく変ったかもしれない」という暗示的なことを記している。

ともあれ、中国文学を媒体にして出逢った師弟の邂逅は、やはり運命的なもの必然的なものであったように思われる。

それはそれとして、当時の京都大学の学風なるものは「さらにまた、京都大学を中心とする極度に厳格な実証主義的学風は、文学青年気質など全然よせつけないということもある。太宰治がかりに京都シナ学系に籍をおいていたら、その文学的開花以前に自殺していたであろう」（「京都の文学青年達」『全集』第十四巻所収）というものであった。

良かれ悪しかれ、学問研究が厳しいものであるという体験は、筆者などにさえ多少はあるが、京大の雰囲気は一種特別のものであったらしい。その中で創作と研究という二足の草鞋を履き続けていくことを高橋は決意していた。彼が卒業論文に『文心雕龍』を選んだのも、吉川の中国文学史の講義などでその本の名と内容を聞いてのことであったろう。

これから、出逢いの三項め、事象との出逢いのまけいくさになるわけだが、これは余りにも大きすぎて、高橋の中国文学論とは直接には関らぬので、後に小説を論じる所まで後送りにしたい。

八

高橋の卒業論文を論じるまで、随分と回り道をしたが、彼がなぜ卒業論文に『文心雕龍』を選んだかを知るためのそれであった。

以上のことを概観的にではあっても一応押さえておくことが、これからの論を展開する上で必要であった。次稿では、やっと中国文学論の本論に立ち入ることにしたい。

〈一九八八・九・三一〉